



Title	老人性難聴者の聞こえ方の理解と対応方法の調査-高齢者施設における職種別調査から-
Author(s)	長尾, 哲男; 鎌田, 篤子; 東, 登志夫
Citation	長崎大学医学部保健学科紀要 = Bulletin of Nagasaki University School of Health Sciences. 2003, 16(2), p.121-126
Issue Date	2003-12
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10069/18027">http://hdl.handle.net/10069/18027</a>
Right	

This document is downloaded at: 2020-10-30T07:34:46Z

# 老人性難聴者の聞こえ方の理解と対応方法の調査

—高齢者施設における職種別調査から—

長尾 哲男<sup>1</sup>・鎌田 篤子<sup>2</sup>・東 登志夫<sup>1</sup>

**要旨** 高齢者施設における老人性難聴者の聞こえ方の理解と対応方法を明らかにすることを目的として、職種別アンケート調査を行った。対象は、長崎県内の介護老人保健施設や軽費老人ホームの822名の職員、長崎大学医療技術短期大学部学生62名であった。老人性難聴の実態や対応方法は、職種や経験年数の違いによってばらつきがみられた。その要因には、教育的背景や職種による業務の違い、経験による学習効果などが考えられた。家族指導では、補聴器や福祉機器の利用の必要性も示された。今後、老人性難聴の実態を十分に認知させ、対応技術の向上により職種や経験の差をなくし、家族に対しての指導も充実させる必要があると考えられた。

長崎大学医学部保健学科紀要 16(2): 121-126, 2003

**Key Words** : 老人性難聴, 職種, 経験年数, 対応方法

## はじめに

我が国では、急速に高齢化が進んでいる。井口らは65歳以上の約6割は聞こえに何らかの不自由を感じている<sup>1)</sup>ため、高齢社会は難聴高齢者の社会ともいえる。特に老人性難聴は、加齢に伴い徐々に聴力が低下するものであり<sup>2)</sup>多くの高齢者が抱える問題である。

だが、高齢者施設における老人性難聴についての報告は少なく、その理解や対応についての報告は更に少ないようである。

今回、職種や経験の違いによる老人性難聴の聞こえ方の理解や対応方法を明らかにし、今後の老人性難聴者とのコミュニケーション技術に生かすことを目的に研究を実施した。老人性難聴についての職種別アンケート調査を長崎県内の高齢者施設職員と長崎大学医療技術短期大学部学生の協力を得て行ったので報告する。

## 対象と方法

長崎県内の介護老人保健施設や軽費老人ホーム(2002年「医療と福祉のてびき」医療と福祉を考える長崎懇談会より使用)37施設の回答の得られた822名の職員と長崎大学医療技術短期大学部学生62名を対象にアンケート調査を行った。調査期間は、平成14年11月中とした。アンケート調査票を69施設に郵送し、無記名回答後、後日返信してもらった(69施設中回答が得られた施設は37施設)。アンケート調査項目は、年齢、職種、経験年数、老人性難聴者と接する頻度、老人性難聴者の聞こえ方の理解、対応、家族指導の有無とその内容とした(表1)。

表1. アンケート調査項目

基本的属性	年齢、職種、経験年数、老人性難聴者と接する頻度
老人性難聴(自由記述)	老人性難聴の認識、聞こえ方の理解、対応
家族指導(自由記述)	指導の有無、指導内容

## 結 果

### 1. 基本的属性

職種の内訳は、介護福祉士22%、介護職20%、看護職15%、ヘルパー13%、事務職5%、学生7%、リハビリテーション関連職種(理学療法士・作業療法士・言語聴覚士、以下リハ職)4%、その他(医師、相談指導員、ケアマネージャー、管理職、厨房等)12%であった(図1)。

年齢は、平均34.0歳で、年代は多い順に20代が43%、30代と40代が22%、50代が7%であり、60代以上と10代が2%であった(図2)。

経験年数は(学生を除く)、その職についてからの期間が5年以上37%、3~5年以内32%、2年未満16%、1年未満8%、半年未満5%であった(図3)。

老人性難聴者と接する頻度は、毎日63%、週数回16%、月数回2%、年数回3%、今までに数回以内7%、無し7%であった(図4)。

1 長崎大学医学部保健学科作業療法学専攻

2 介護老人保健施設貞寿苑リハビリテーション室

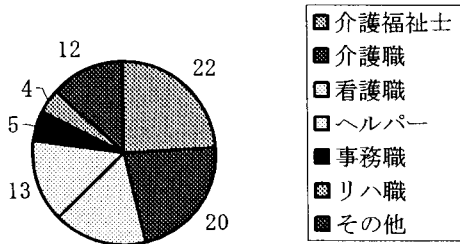


図1. 職種の内訳

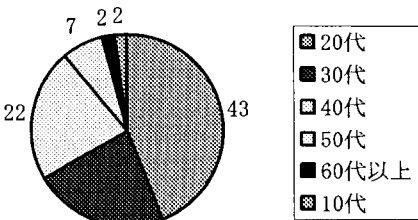


図2. 年齢の区分

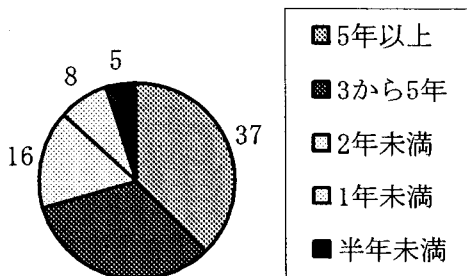


図3. 経験年数

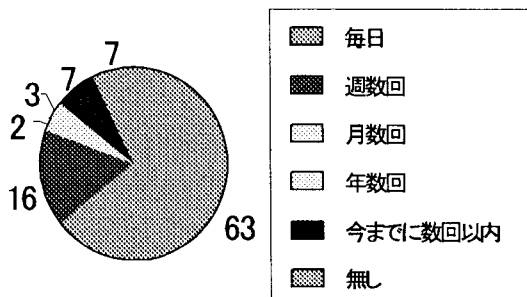


図4. 老人性難聴と接する頻度

## 2. 老人性難聴の聞こえ方の理解

### 2-1 全職種

老人性難聴を知っていると回答した者は、94%と多かった。

老人性難聴者の聞こえ方の理解は全体的に低く、最も回答の多かった高低（高い音が聞こえにくく、低い音が聞こえやすい）で16%、次の小さく聞こえるは13%であった（図5）。

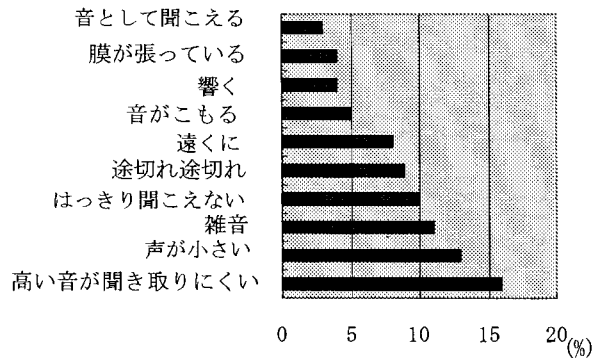


図5. 老人性難聴の聞こえ方

### 2-2 職種別の違い

リハ職は、高低について理解が高く38%、次いで学生が24%と他の職種に比べて高かった（図6）。

## 3. 老人性難聴者への対応

### 3-1 全職種

ゆっくりと41%、大きな声40%、耳元から話しかける35%、筆談35%、身振り手振り35%の順に多かった（図7）。

聞こえ方の理解で最も回答の多かった高低は対応になると13%と少なかった。

### 3-2 職種別の違い

リハ職は、筆談66%、身振り手振り56%の対応が多かった。筆談は、リハ職に次いで、その他職種50%、看護職49%、が多かった（図8）。

学生は、身振り手振り11%、筆談5%の対応が少なかった。

介護福祉士、ヘルパー、介護職では、対応にほとんど差はなかった。

### 3-3 経験年数の影響

半年未満と3年以上の経験年数の比較では、筆談16%が42%、身振り手振り22%が39%と多くなっていた（図9）。高低の対応は、経験年数に関わらずほとんど変化がみられなかった。

## 4. 家族指導

家族に対しての指導を行なったことのある職員は、全体のわずか13%と少なかった。職種の内訳は、リハ職70%、看護職21%、介護福祉士16.1%、介護職10.5%、ヘルパー4%、事務職4%であり、リハ職が指導を行なっている場合が多かった（図10）。

主な指導内容は、ゆっくり50%、低い声31%、耳元24.1%、大きく23.3%、はっきり17.2%などの順に多かった。また、補聴器やもしもしフォンなどの利用を勧めると回答した職員は、116名中25名で、22%であった。

老人性難聴者の聞こえ方の理解と対応方法の調査

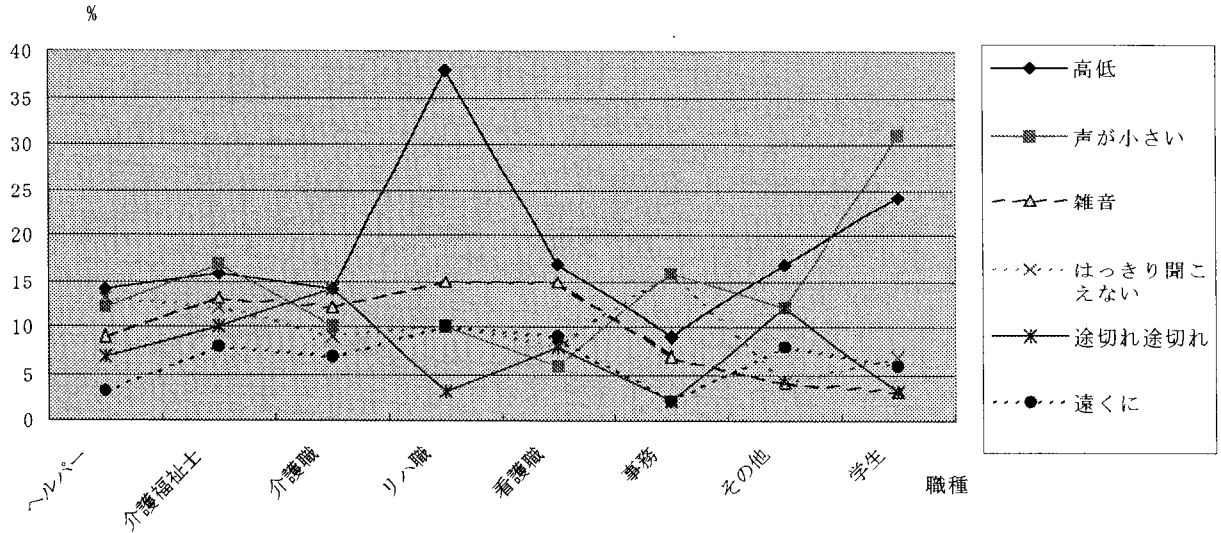


図6. 老人性難聴の聞こえ方（職種別の違い）

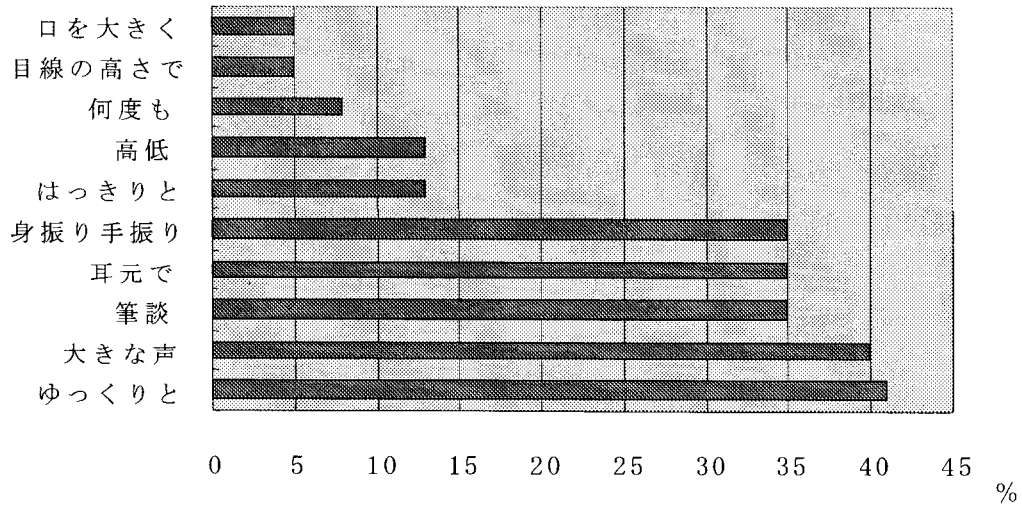


図7. 老人性難聴者への対応

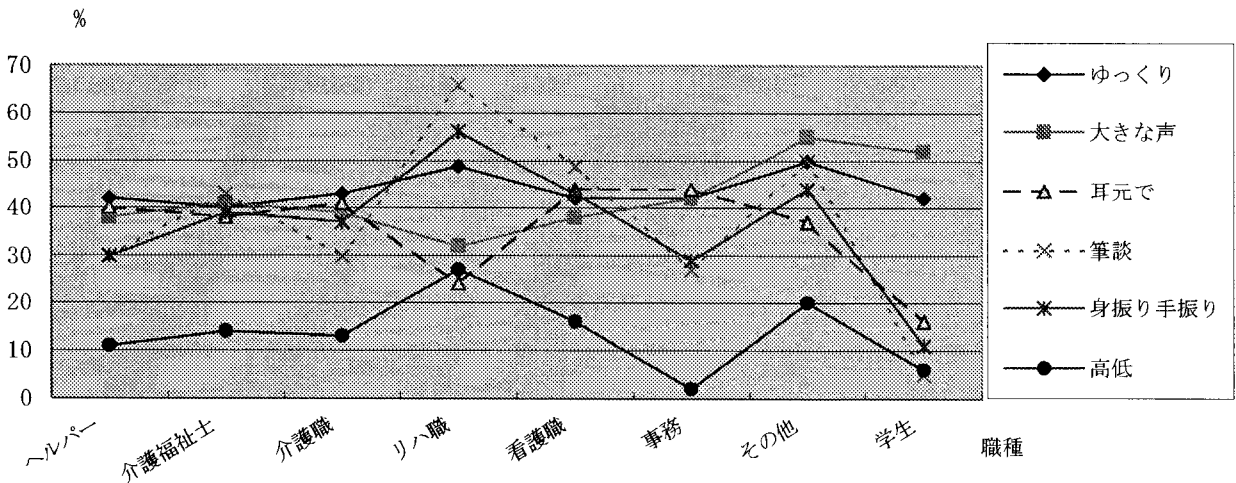


図8. 老人性難聴者への対応（職種別の違い）

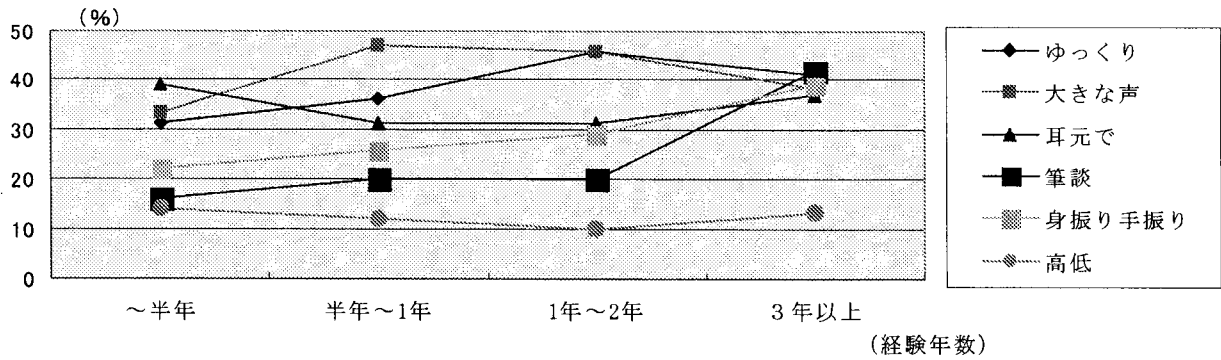


図9. 経験年数と対応の変化の様子

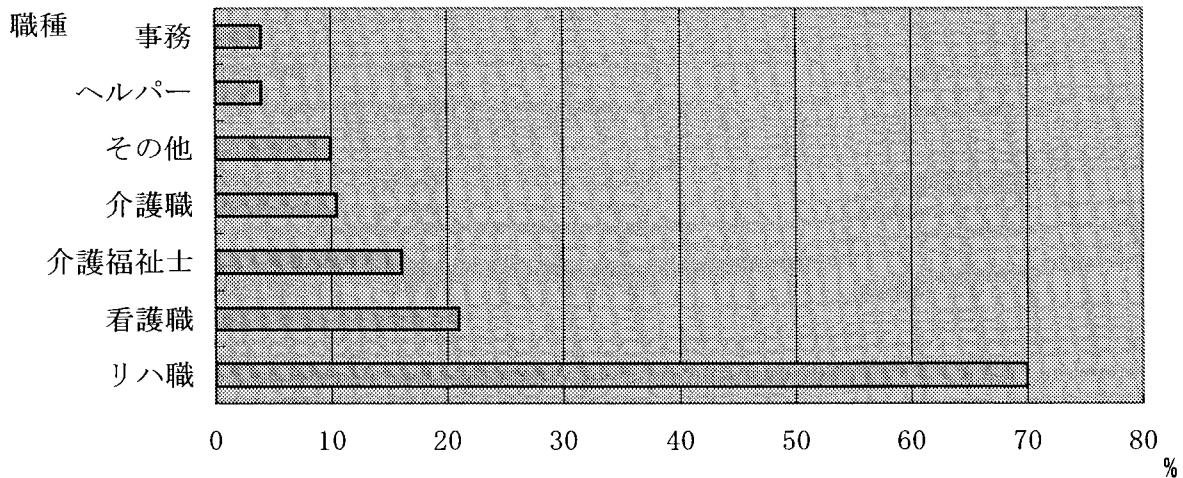


図10. 家族指導 (職種内訳)

考 察

老人性難聴を知っていると回答した者は94%と多かったが、老人性難聴者の聞こえ方の理解は全体的にばらついていていたため、老人性難聴の実態は十分に理解されていないのが現状ではないかと考えられた。

職種による聞こえ方の理解の違いについては、教育的背景が要因として考えられた。老人性難聴は、高音域が聞き取りにくいのが特徴の一つだが、その理解が高かった職種は、リハ職と学生であった。教育課程の中で、介護職、ヘルパー、介護福祉士、看護職は老人性難聴について学ぶ機会が少ないか、機会があってもさほど重要視されていない可能性が考えられた。

対応方法としては、筆談や身振り手振りのように、視覚を利用する言語（筆談）・非言語（身振り手振り）手段であれば、聴覚を利用する情報伝達に比べて、より確実な情報伝達が可能である。経験の長い職員ほど筆談や身振り手振りを有効な手段として学習するため、使用が増加したのではないかと考えられた。また、リハ職、看護職、その他職種が筆談を多く使用する理由として、日頃の業務の中で、本人に情報伝達を正確に行う必要のある職種である点が考えられた。

対応方法の中で高低（声の高さに配慮した対応）が経験年数によっても変化が見られなかった理由として、認

識があっても実践することが難しく、経験によっても影響されにくい方法である点が考えられた。

家族指導は、全体のわずか13%しかなく不十分であった。補装具や福祉機器の利用の必要性も示され、老人性難聴にも、補聴器が有効<sup>1)</sup>であるため、装用効果は期待される。しかし、利用者は難聴以外にも痴呆等の精神機能の低下や手先の運動の巧緻性が衰え、操作が上手くできない等身体機能の低下の問題も合併している場合も多いため、個人の能力やコミュニケーション環境を十分考慮した上で、難聴や補聴器に対する理解のある職員が指導する必要がある。

今後の課題として、①老人性難聴の実態を職員に認知させる②職員の対応技術の向上により、職種や経験による差をなくす③家族に対する指導を充実させる、が考えられた。

今回の調査で、老人性難聴に対して理解の高かったリハ職は、利用者や家族ばかりではなく、他職種に対しても老人性難聴の啓蒙活動や対応技術の指導などの役割が期待される。また、老人性難聴者の生活がより快適になるよう、今後対応技術については、検討していきたいと考えている。

本研究は、文部科学省の平成14年科学研究費補助金により行なった。

文 献

- 1) 井口邦雄, 他: 老人性難聴に関するアンケート調査報告, 広島医学, 50, 1108~1119, 1997
- 2) 岡本牧人: 老人性難聴, 総合リハビリテーション25 卷8号, 705~709, 1997

# Understanding hearing loss and hearing loss management in the elderly Survey by occupation at care houses for senior citizens

Tetsuo NAGAO<sup>1</sup>, Atsuko KAMADA<sup>2</sup>, Toshio HIGASHI<sup>1</sup>

1 Nagasaki University School of Health Sciences

2 Geriatric Health Services Facility Shinjuen

**Abstract** A survey to determine the understanding among different health care professions of hearing impairment in the elderly, and its management was conducted. 822 employees at 37 nursing care institutions for elderly people and low expense nursing homes and 62 students of the Nagasaki University, School of Health Sciences were surveyed. The results indicated that understanding the conditions of hearing loss and its management differed with occupation and number of years of experience. The differences resulted from educational background, type of work and experience. The necessity for familiarity with hearing aids and other welfare equipment was indicated with regards to instructing family members. The condition of hearing loss should be fully understood by the personnel engaged in nursing care for the elderly. It is also important to narrow the differences in hearing loss management resulting from occupations and experience by improving training. Instruction of family members about the impairment should be emphasized.

Bull. Nagasaki Univ. Sch. Health Sci. 16(2): 121-126, 2003